

国連アジア極東犯罪防止研修所第169回国際研修に参加して

千葉地方検察庁 検事 福嶋慶彦

1 はじめに

私は、平成30年5月8日から同年6月14日までの間、国連アジア極東犯罪防止研修所（以下「アジ研」）において行われた第169回国際研修（以下「本研修」）に参加させていただきました。本研修には、16の国（地域）から、裁判官、検察官、警察官等24名が参加し、日本からは、裁判官、警察官、麻薬取締官、海上保安官各1名に検察官3名を加えた7名が参加しました。

本研修では、約6週間、参加者全員が平成29年10月に開設されたばかりのアジ研の研修施設内にある寮に入り、寝食を共にしました。そのため、研修期間中は、朝から晩までずっと英語を話す毎日を送ることになったのですが、私は英語が苦手なため、研修参加前、この点にとっても不安を感じていました（もっとも、日々の講義やグループワークでは、同時通訳をしていただいていたので、研修内容はしっかり理解することができました。）。結果的には、こんな私でも、充実したすばらしい経験をすることができましたので、この機会に、本研修の様子を御紹介したいと思います。

2 研修初日の出来事

研修初日は、オリエンテーションや各参加者の自己紹介等といった簡単な内容から始まったのですが、いざ始まってみると、私は、英語をほとんど聞き取れないということを知り、初日から、頭を悩ませることになりました。初日の夜には、参加者に対する歓迎パーティーが開かれたのですが、案の定、私は海外参加者から話しかけられても、その内容を聞き取れないので、会話にならず、多くの海外参加者との間で気まずい空気を作り続けてしまいました。話をしたいのに、聞き取れないのでどうしようもないというもどかしい気持ちでした。

私は、このままでは次第にみんなから相手にされなくなるのではないかとという焦りもあり、とにかく、英語が苦手だということを理解してもらうことにし、まずはこの日のパーティーで、最後まで残っていた通称ガスさん（パプアニューギニアからの参加者、本研修ではお互いを呼ぶためのニックネームを決めていました。）と通称モリスさん（コートジボワールからの参加者）に対し「今日は話ができ楽しかった。俺は、英語ができないけど、これからも、おまえとたくさん話がしたいんだ！」と伝えてみました。すると、2人とも「オーケー！頑張ってコミュニケーションをとっていこうぜ！」とってくれたので、私は、どの国にも心優しい人はいるんだなととても感動しました。それ以降、2人は、ゆっくり話してくれたり、私が言葉を聞き取れなくても、何度も言い直してくれたりと私に合わせてくれるようになり、2人とは気兼ねなく一緒にいられる友人になりました。私は、他の参加者に対しても同じ方法で少しずつ友情の輪を広げていけたので、英語に対する不安を解消することができました。

3 研修内容について

(1) IPセッション・講義・グループワーク

本研修における研修テーマは「薬物不法取引等犯罪対策の実務」というものでした。

本研修では、このテーマに沿って、まず序盤に、各参加者があらかじめ作成したレポートを基に個人発表を行い、中盤には、国内外の専門家による講義が行われ、そして終盤には、参加者が3つのグループに分かれて討論を行い、その結果を発表するということが行われました。

各国における薬物不法取引等の現状や薬物犯罪の摘発に向けた捜査、訴追手法等について知ることができたのですが、これらを通じて感じたことは、どの国においても、薬物犯罪の撲滅というのは共通のテーマであり、捜査上の問題点も、各国共通しているのだなということでした。私自身も、これまでに薬物事件を扱うことはありましたが、末端の薬物使用者や末端の密売人を処罰するにとどまってしまっており、密売組織の全容解明に至る事案はほとんどありませんでした。そのため、私は、自分の捜査に問題があるのではないかなどと考えることも多かったのですが、本研修を通じて、私が感じていた課題は、各国共通のものなのだと実感することができ、視野が広がった思いがしました。そして、海外参加者たちは、こうした課題、問題点を前提にしながらも薬物犯罪を撲滅させようという熱い気持ちを持っている人ばかりだということも分かりました。世界各地に、同じ気持ちで捜査に当たっている同志がいるのだと分かり、私も頑張らねばと気持ちを新たにすることができました。

(2) 研修旅行

研修終盤では、参加者全員で、広島、神戸、京都への研修旅行がありました。それぞれの地において、薬物犯罪取締りに従事する関係機関を見学したほか、残りの時間を使って市内観光もしたのですが、その中で印象に残ったのは、広島平和記念公園と広島平和記念資料館を訪れたときのことでした。私自身、初めて訪れたこともあり、いろいろな資料を見て改めて原爆被害のすさまじさを感じたのですが、海外参加者も神妙な面持ちで見学していました。見学を終えた後、バスの席で一緒になったホドリゴさん（ブラジルからの参加者）は「見学していて、涙が出てきそうになった。悲しかった。」と話していました。私は、日本の歴史に共感してくれたことに胸が熱くなりました。

4 日常生活の様子

(1) 1日の研修終了後の生活

1日の研修後、各参加者は、それぞれ家電量販店等買い物に出掛けたり、寿司やラーメンなど日本ならではの食事をしに出掛けたりと自由に時間を使っていました。私も、海外参加者や日本人参加者と一緒に、買い物に出掛けたり、ちょうど、近所で開催されていた大きなフードイベントに行ったこともありました。そこで売られていたうに丼を見たとき、私が、一緒にいたガスさんに「食べたいけど、すごく高いんだよな。」という話をしたところ、ガスさんは「パプアニューギニアでは、うにを食べない。うになんかたくさんいるから、日本で高く売れるなら、日本で輸入すればいい！」などと言っていました。私は、文化の違いにちょっとした驚きを感じるとともに、ガスさんに「俺たちの将来のビジネスにしよう。」などと冗談を言ったりしながら楽しい時間を過ごしました（後から日本人参加者に聞いたところ、ガスさんは本気でビジネスにしようと考えている様子だったそうです）。

また、研修中盤頃には、卓球大会が予定されていたので、大会が近づいてくる

と、研修所内のジムにおいて、みんなで毎晩のように卓球の練習をしました。ここで大活躍していたのは、通称バレンティンさん（ウクライナからの参加者）でした。普段は物静かなのですが、練習では熱く、鋭いショットを何度も打ち込んでいました。私たち日本人は何度も勝負を挑んだのですが、結局勝ち越すことはできませんでした。私たち日本人に快勝した後、涼しい顔で「いい試合だったな。」と言ってくるバレンティンさんの顔は、今でも忘れられません。

(2) ラウンジBでの集い

研修所内には、ラウンジBという大きな部屋があり、各参加者は、よく集まっては酒を飲んだり、歌ったり踊ったりして交流を深めていました。たとえ知らない曲であっても、自然とみんなで踊り出し不思議な一体感が生まれていました。私も一緒になって踊る度に、音楽は世界共通なんだななどと思ったりしました。

あるときには、各参加国ごとに自分の国の文化を紹介する出し物をするという企画をしたことがありました。そこでは、各参加者が自国の歌や踊りを披露したのですが、みんな積極的で、普段であれば聞くことのない曲をたくさん聞くことができました。日本の出し物としては、通称ハイジさん（日本人参加者、今回は私を含め似た名前の参加者が多かったため、自分の名前から離れたニックネームの参加者もいました。ちなみに、私は、ハイジ繋がり「ペーター」と命名されました。）指導の下、ソーラン節を練習し、披露しました。少ない練習時間でしたが、一丸となって必死に練習したおかげで、本番では教官や海外参加者等を巻き込み、一緒に踊り盛り上がることができ、大成功を収めることができました（ただ、翌日、日本人参加者はみんな激しい筋肉痛になりました。）。

5 おわりに

冒頭でも述べたとおり、私は、英語力が乏しかったのですが、そんな私でも、海外参加者が優しく、親切にしてくれ、教官、スタッフの皆さんや日本人参加者が至るところで助けてくれたおかげで、本研修を乗り切ることができました。最終日には、皆さんに対する感謝の気持ちや研修修了の寂しさといった気持ちが抑えきれず、涙を堪えきれませんでした。

本研修で得られた経験は、何物にも代えがたいすばらしい経験でした。今後も、この研修で得られた繋がりを大切にしていきたいと思っています。最後に、この研修に参加するに当たり、私を支えてくださった皆様に対し、心から感謝申し上げます。